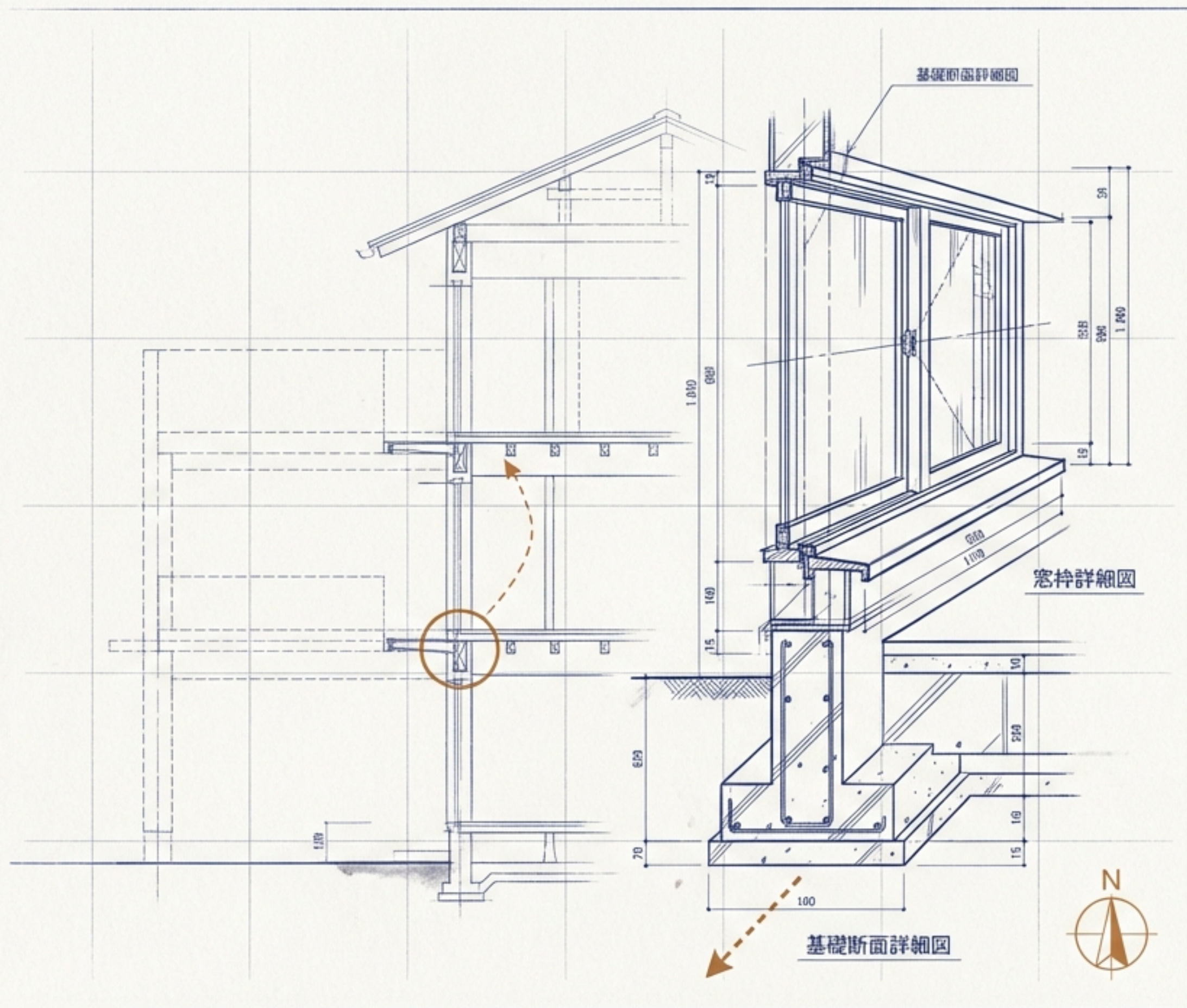


# カリキュラム： 「授業の並び」から 「学びの設計図」へ

教育実践を再構築するための  
視点とアプローチ

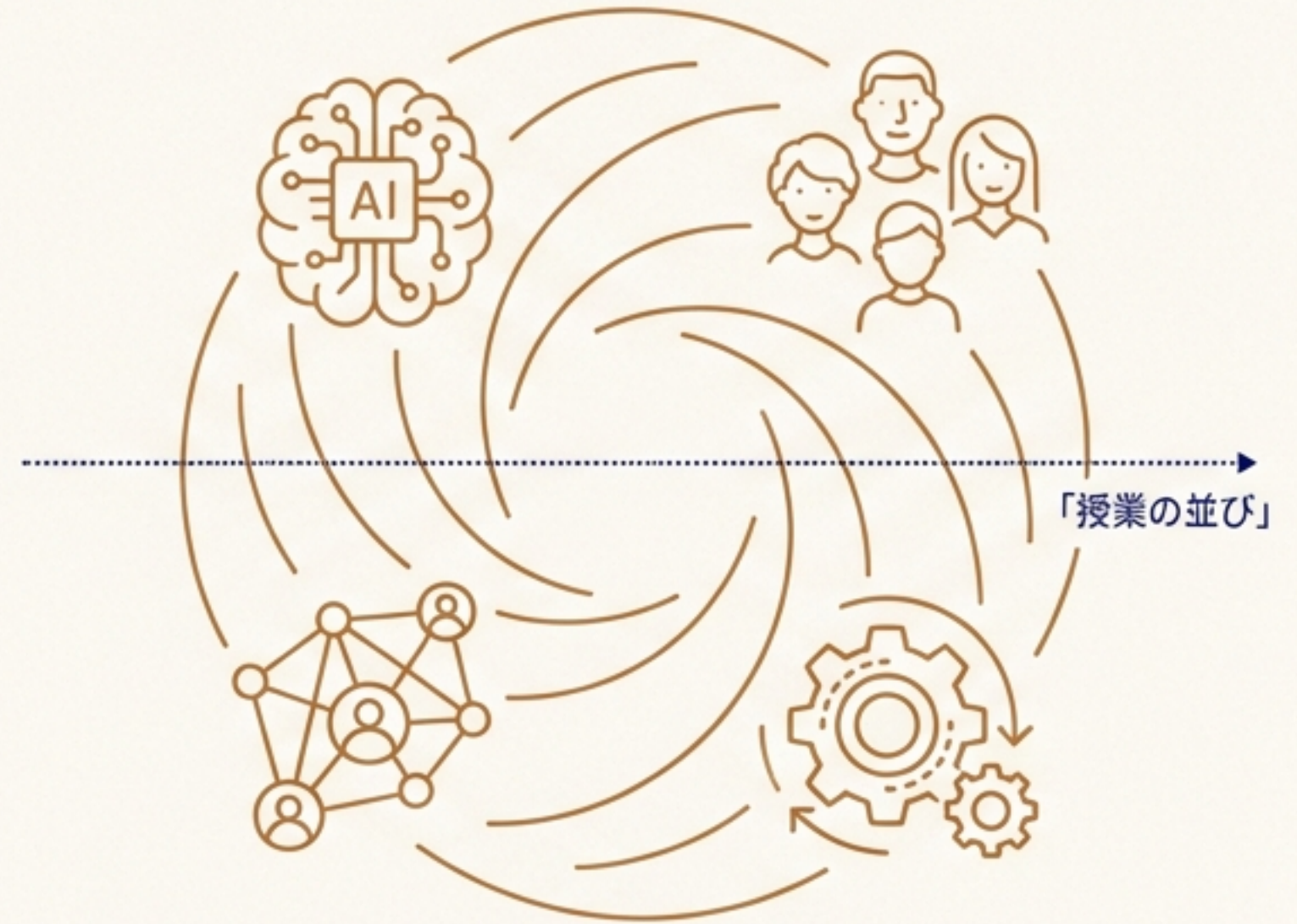


# なぜ今、改めて「カリキュラム」を問うのか？

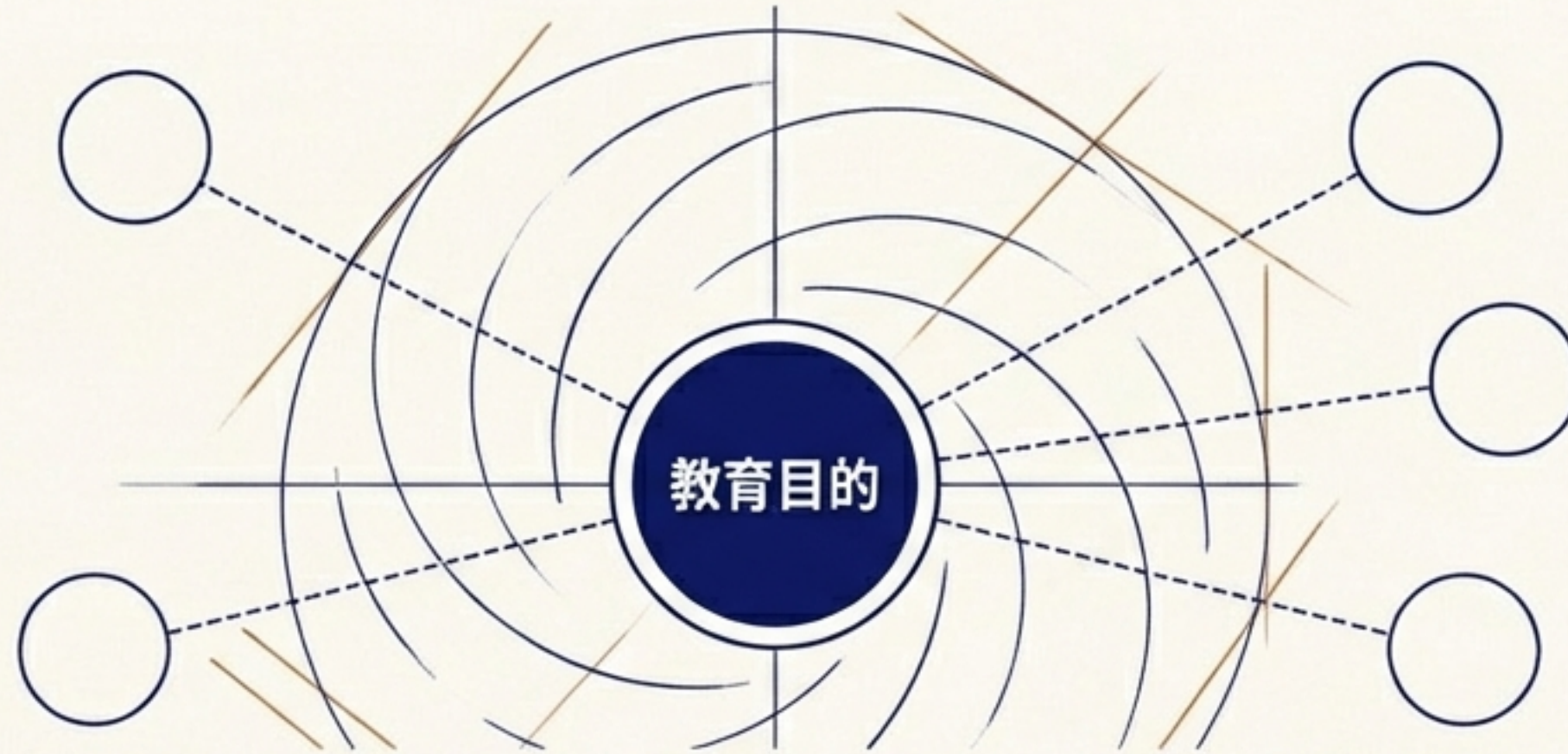
教育現場で日常的に使われる「カリキュラム」という言葉。しかし、その理解は年間指導計画やシラバスといった表面的なレベルに留まっていないでしょうか。

現代の教育環境は、学習者の多様化、ICT・AIの導入、資質・能力ベースへの転換など、かつてないほど複雑化しています。

個々の授業改善だけでは対応できないこれらの課題は、教育全体を支える「設計図」としてのカリキュラムの再設計を求めています。



# カリキュラムの真の定義：学習経験の総体を設計する



カリキュラムとは、単なる「授業の並び」ではなく、教育目的を実現するために構想された**学習経験の総体**である。ラテン語の語源「競走路 (currere)」が示すように、それは学習者が辿る「学びの道筋」そのものを指します。

**それは、教育という営み全体を支える「設計図」です。**

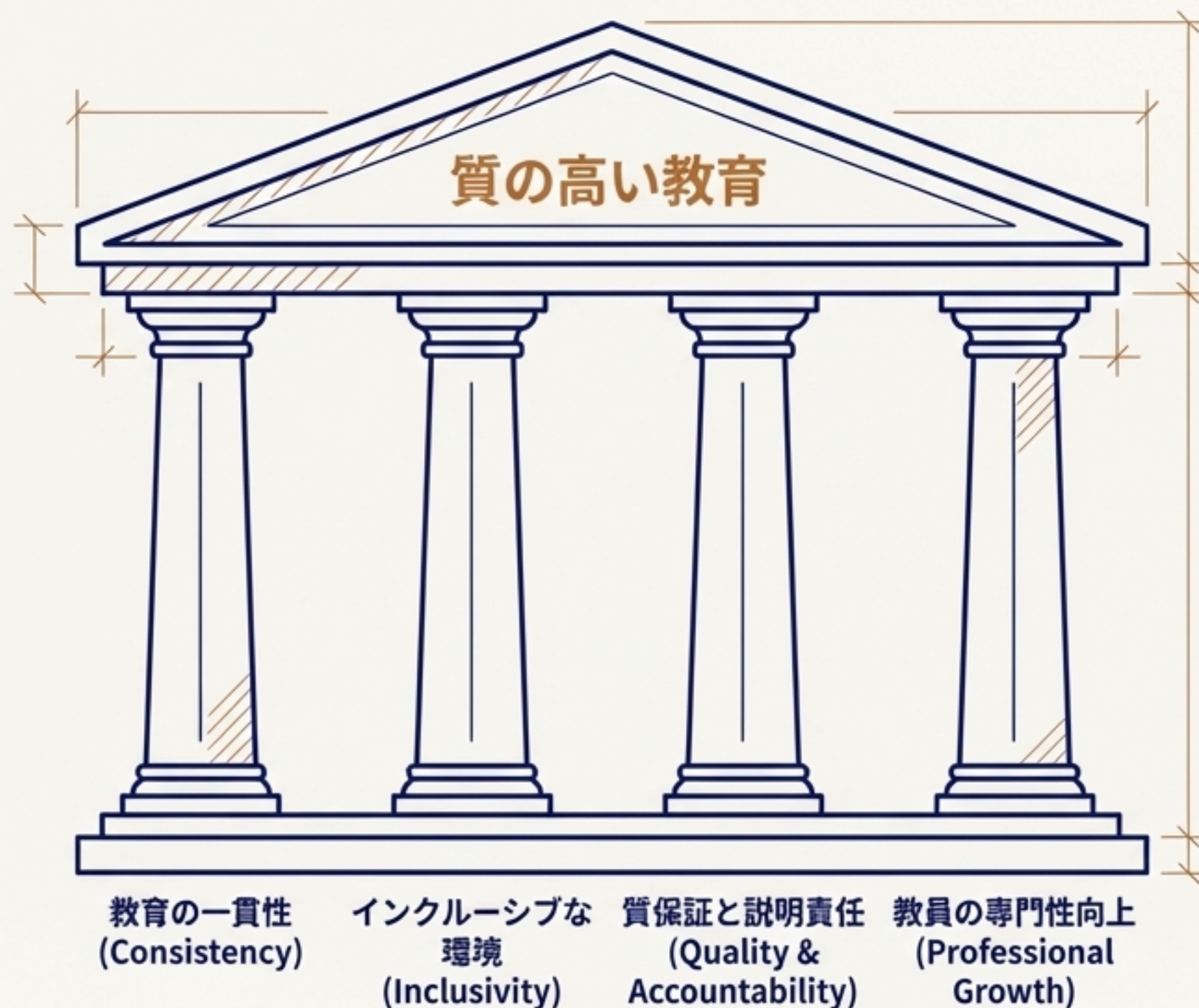
# 「学びの設計図」を構成する5つの統合的要素



重要：これらの要素が**相互に整合的にデザイン**されて初めて、カリキュラムは機能する。

# なぜ精緻な「設計図」が不可欠なのか？

体系的なカリキュラムは、教育実践に4つの重要な価値をもたらします。これらは、質の高い教育構造を支える「4つの柱」と考えることができます。



# 教育の質を支える4つの柱



## 教育の一貫性の保障

複数の教員が関わる中で、学年や学級による学習内容・到達度のばらつきを防ぎ、教育機会の平等を担保する。



## インクルーシブな学習環境の構築

多様な背景をもつ学習者に対し、個々の教員の工夫任せにせず、学校として多様な学び方や表現方法をあらかじめ組み込む（UDLの視点）。



## 教育の質保証と説明責任

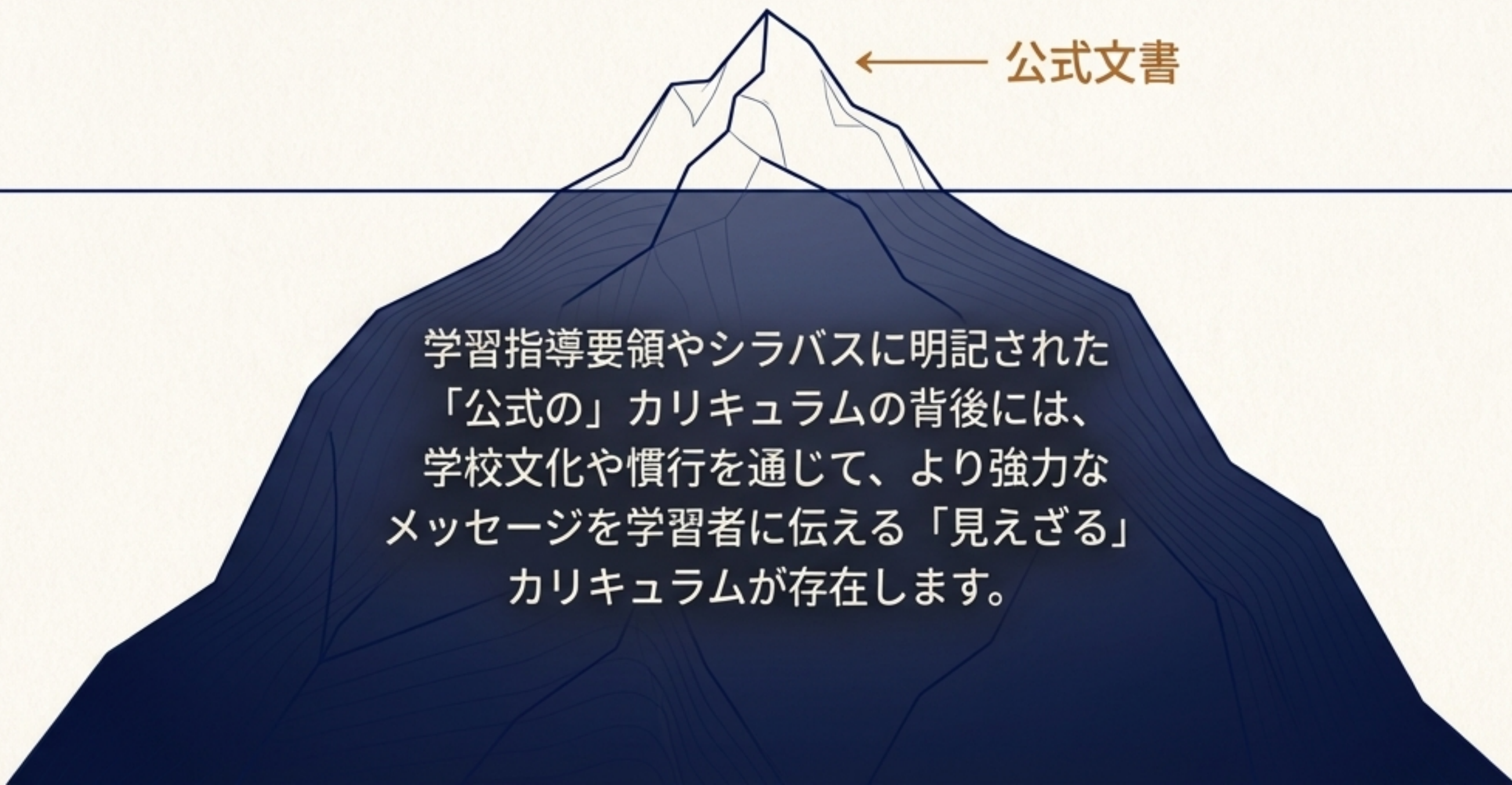
教育の理念・目標・内容を体系的に外部へ明示し、自己点検・評価の基盤とする。教育改善のエビデンスとしても機能する。



## 教員の専門性向上

カリキュラムをめぐる対話は、教員間の教育観の共有や協働的な単元開発を促し、組織的な学び合いの文化を形成する。

# しかし、カリキュラムは公式文書に書かれているものが全てではない

An iceberg diagram with a horizontal line representing the water surface. The small tip above the line is labeled '公式文書' (Official Document). The large base below the line contains text about '見えざる' (Invisible) curriculum.

← 公式文書

学習指導要領やシラバスに明記された  
「公式の」カリキュラムの背後には、  
学校文化や慣行を通じて、より強力な  
メッセージを学習者に伝える「見えざる」  
カリキュラムが存在します。

# カリキュラムの冰山：見えているもの、 隠れているもの、意図的に除外されているもの

## 顕在的カリキュラム (Explicit Curriculum)

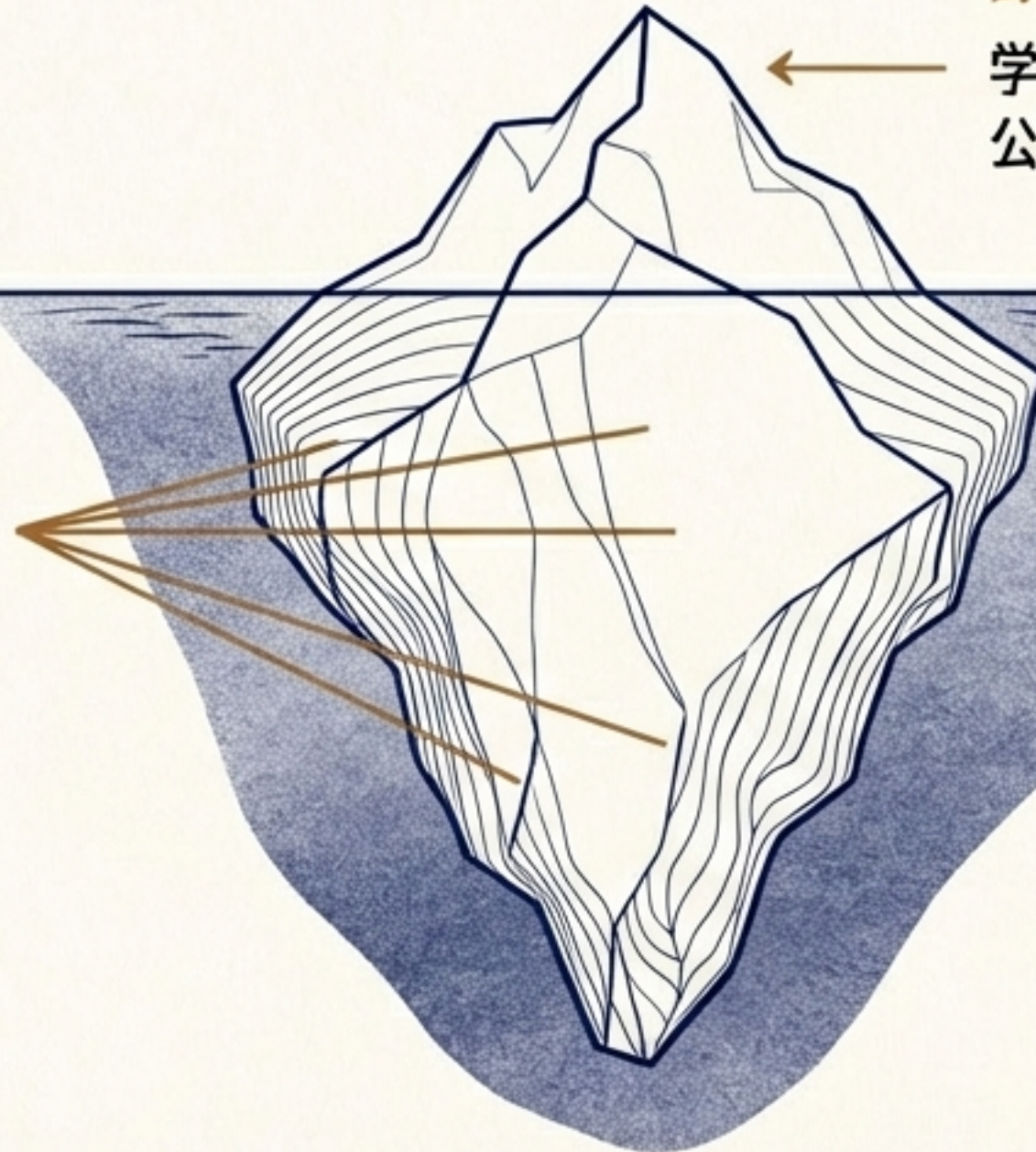
学習指導要領、シラバス、教科書など、  
公式に意図され、明文化されたカリキュラム。

## 潜在的カリキュラム (Implicit Curriculum)

文書化されていないが、学校の慣行、文化、人間関係、時間の使い方などを通じて伝わる価値観や規範。「従順さ」や「競争」など、意図せず学習されることがある。

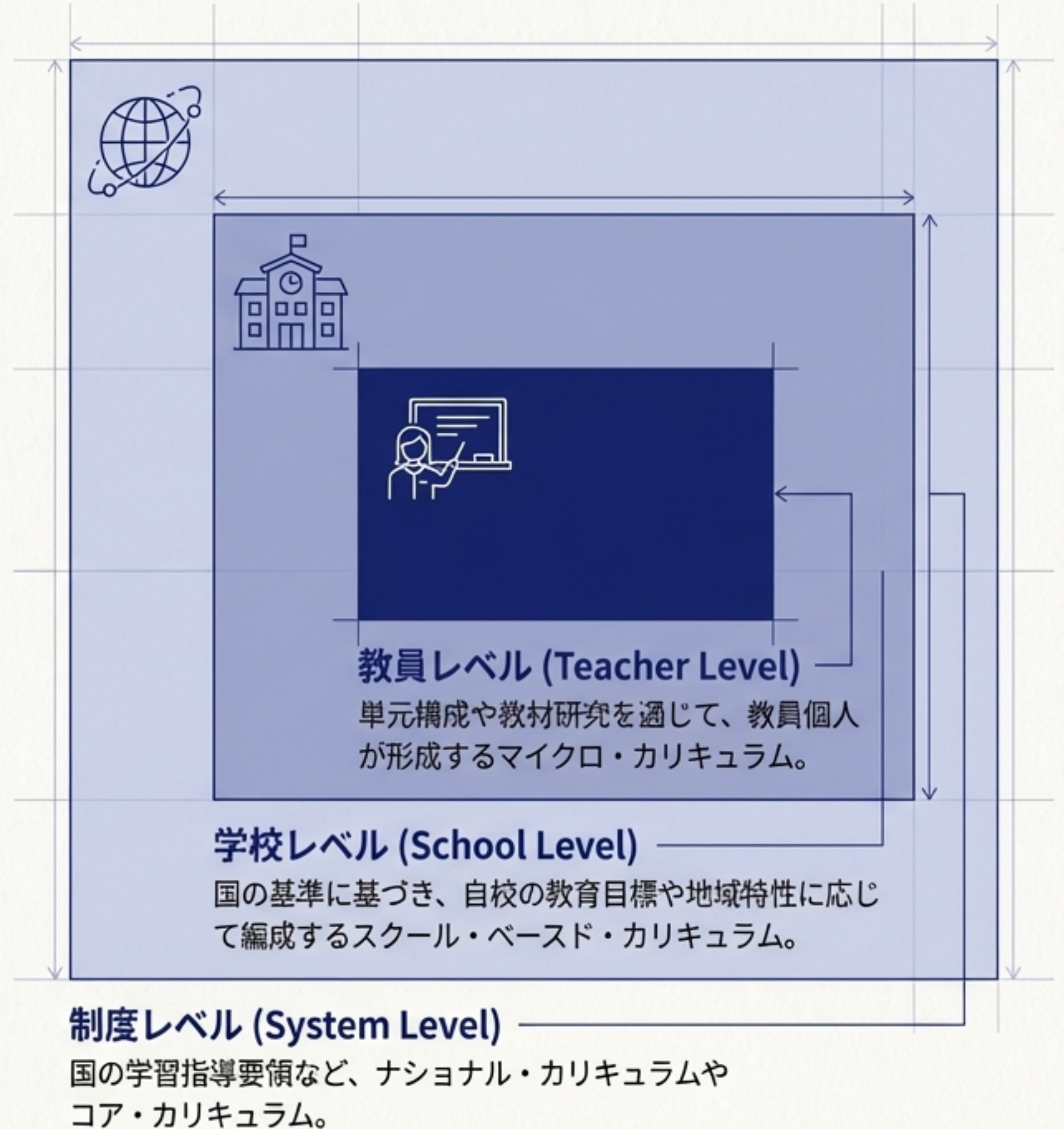
## ヌル・カリキュラム (Null Curriculum)

公式にも扱われず、意図的・無意図的に教えられていない領域。何を「教えないか」という選択そのものが、価値判断を示唆する。



# カリキュラムは多層構造をもつ

上位の基準を受け身で適用するだけでなく、自校の文脈に合わせて主体的に構成することが重要。



# 複雑性を乗り越えるための 「教育工学的アプローチ」

教育を、個々の教師の勘や経験といった  
属人的な技術としてではなく、  
**設計・分析・改善可能な対象**として  
体系的に扱う発想。

- 目的から設計する
- より良い解決策を追求する
- 検証可能な形で効果を評価する
- 改善のサイクルを回し続ける



# 教育を理解する二つのレンズ：工学的アプローチ vs. 羅生門的アプローチ

## 教育工学的アプローチ (Engineering Approach)



### Worldview

複雑な現実を整理し、共通の目標・基準を設定。  
「よりよい設計」を探求する。標準化・一般化を志向。

### Method

ADDIEモデル、バックワードデザイン。  
学習ログ分析などデータ駆動。

### Focus

設計、改善、効率性、効果検証。

## 羅生門的アプローチ (Rashomon Approach)



### Worldview

教育実践を、立場によって異なる複数の「物語」  
として捉える。単一の真実を求めない。

### Method

質的データ、ナラティブ分析。

### Focus

多声性、個々の経験、矛盾や葛藤、権力性や  
価値の対立を読み解く。

# なぜ、あえて工学的アプローチが重要なのか？

羅生門的感性を持ちつつも、実践を「変える」ためには工学的アプローチが不可欠です。



## 1. 改善のための「言語と手順」を提供

課題に対し、どの要素（目標、内容、方法、評価、環境）をどう設計し直すかを構造的に思考できる。



## 2. プロセスを「共有財産」にする

設計手順や評価の枠組みが明示されることで、「暗黙知」に頼らない協働的な開発が可能になる。

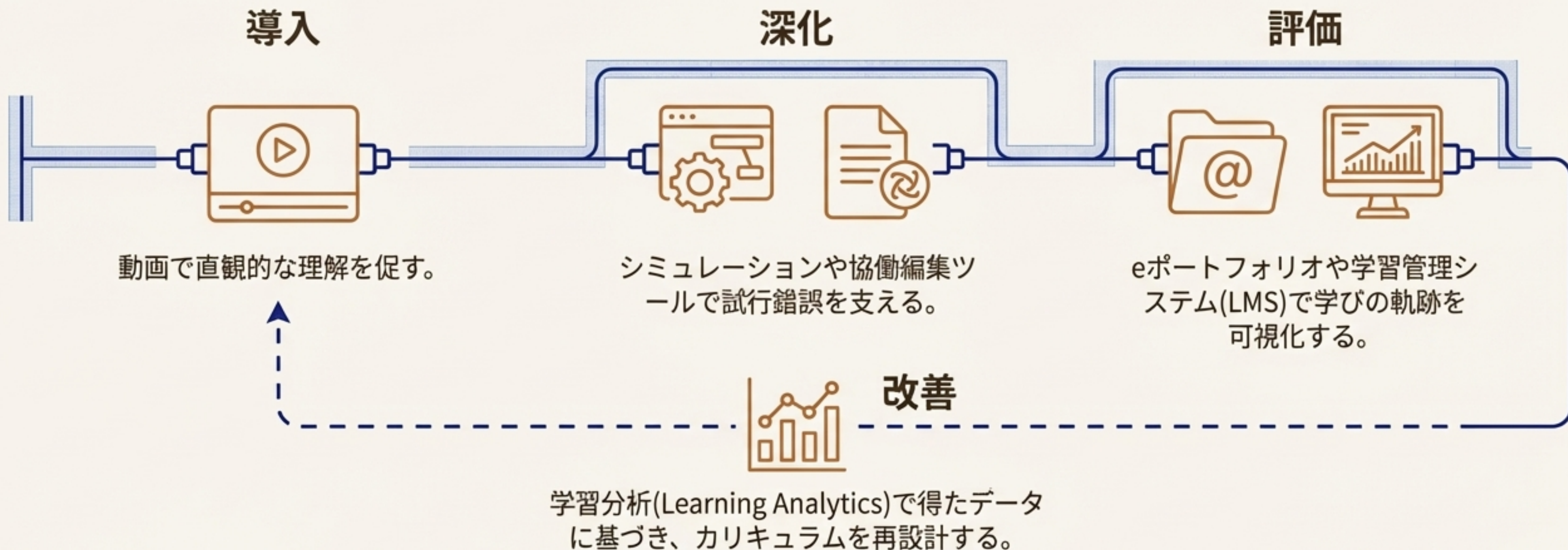


## 3. 「質保証と説明責任」を果たす

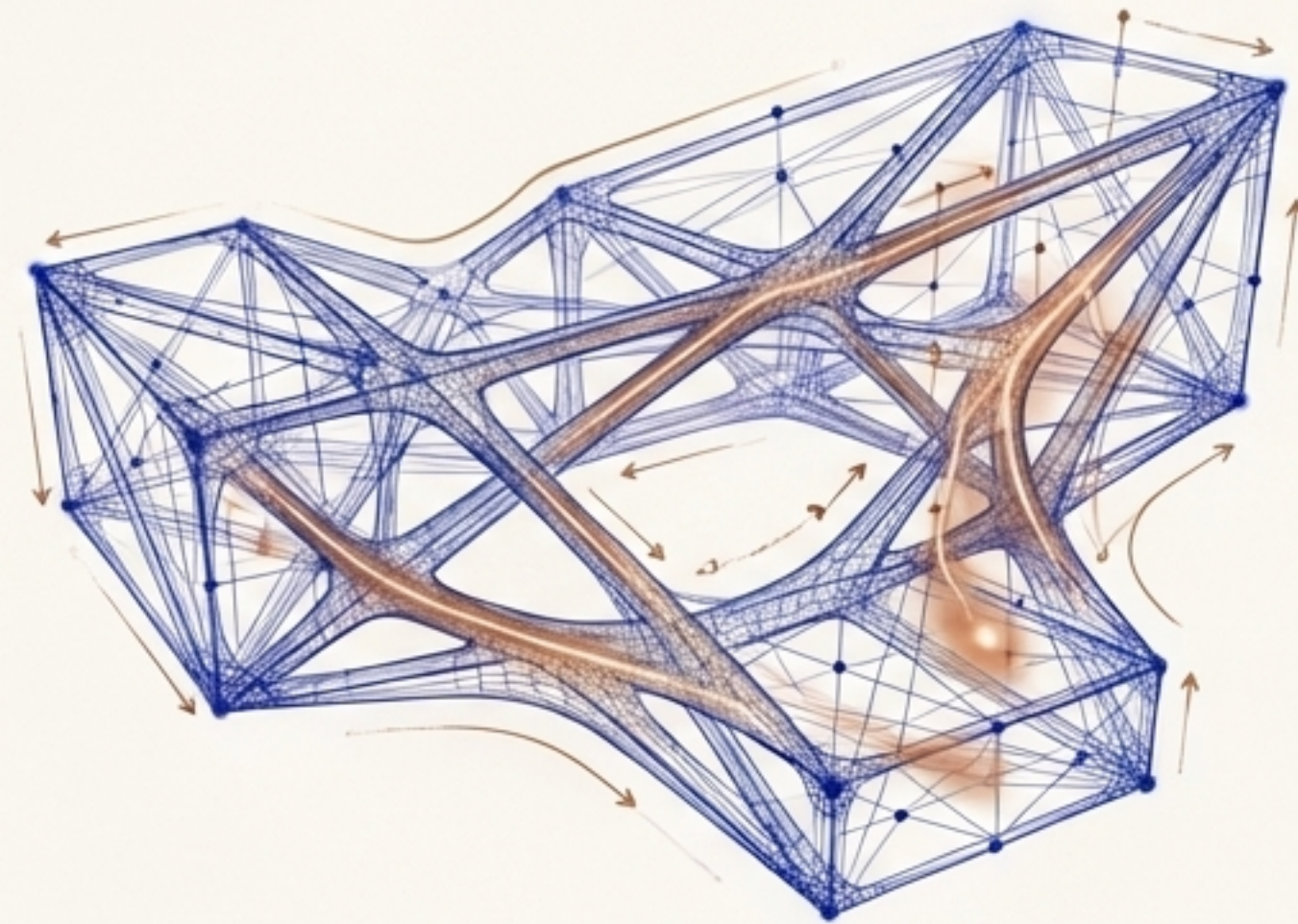
目的、手段、結果の関係性を明示し、外部への説明責任を果たすための論理的基盤となる。

# テクノロジーを統合する工学的視点

現代のカリキュラムは、紙の教科書だけでは完結しません。教育工学は、メディアの特性と学習課題を分析し、最適なテクノロジー活用を設計します。



# カリキュラムは「完成品」ではなく「生きた構造」である



これまで見てきたように、カリキュラムは一度作って終わりではありません。  
それは、多様な学習者のニーズ、新たなテクノロジー、そして日々の実践からのフィードバックを受け、  
絶えず更新されるべき「**生きた構造 (A Living Structure)**」です。

# あなたの「学びの設計図」を、更新し続けよう

本講義で得た視点を用いて、自校・自らのカリキュラムを批判的に分析してみましょう。

- 👉 顕在的・潜在的なメッセージは何か？
- 👉 各要素は、本当に整合性が取れているか？
- 👉 工学的なアプローチで改善できる点はないか？

日々の実践と対話を通じて、学習者のための「生きた構造」を共に築き上げていきましょう。

